

ozol 投与後の BMD 変化量, BMD 変化率ともに有為に低下していた。骨折事象は認めなかった。【考察】 ATAC trial の結果から, 閉経後乳癌症例に対する術後補助内分泌療法的第一選択薬としてアロマターゼ阻害剤を考える。しかしアロマターゼ阻害剤内服の場合には骨粗鬆症には注意が必要であり, 定期的な骨塩量測定が必要と考えた。

〈セッション 6〉

患者支援

座長 小島 誠人

17. 乳腺看護外来における認定看護師の役割と今後の課題について ～乳がん看護認定看護師の認知度調査より～

市川 加代

(伊勢崎市民病院 乳がん看護認定看護師)

村井 綾子, 河原 敦子, 深沢いく子

(同 外科病棟)

石崎 朗子, 片山 和久, 根岸 健

(同 外科)

【はじめに】 乳がん看護認定看護師は平成 18 年 7 月に一期生が誕生したが, 医療関係者からまだ認知されていない現状である。乳腺科医師へ乳がん看護認定看護師に対する認知度と期待する役割を調査することで今後の活動の方向性を明らかにした。【研究目的・方法】 埼玉・群馬県内の乳腺科医師に乳がん看護認定看護師の認知度調査をすることで, 今後の活動の見直しをはかる。【結果・考察】 乳がん看護認定看護師を知っている医師は 76%, その役割を知っていると回答した医師は 65%であった。期待する役割として最も回答が多かったのは, 精神的フォローであり次いでチーム医療であった。今後多くの医師やコメディカルに役割が認知され, チーム医療の中核としての役割が担えるよう講演会や活動報告などの広報活動が必要である。また, 乳癌患者に必要な介入時期としてがん告知時への介入との回答が最も多く, 次いで術前後の補助療法期であった。最も期待されている役割である精神的フォローを中心とした支援を, がん告知時や補助療法時など患者個々の適切な時期に介入できる能力が求められている事が理解できた。スタッフとの連携を強化し, 得た情報から患者のニーズや必要性を見極めて適切な時期に適切な看護介入が行えるように引き続き乳腺看護外来における活動の拡大を図ってきたい。

18. 乳がん患者が外来によせる電話相談の実態調査

前原みゆき, 辻 洋子, 宇野みな子

工藤富士子

(埼玉県立がんセンター 看護部)

井上 賢一, 田部井敏夫 (同 内分泌科)

【背景】 在院日数の短縮, さらに外来診療へのシフトが加速している現在, 患者は治療を継続しながらまたはがんを抱えた状態で社会生活を送っているが, それを支援する病院の体制は今だ十分でないのが現状である。

【目的】 夜間・休日の外来当直看護師によせられる相談の実態と傾向を把握し, 病棟, 外来, デイケアセンターにおける医療側の支援体制を検討する。【対象】 当センターにおいて, 2005 年 7～10 月に, 夜間・休日電話相談のあった乳がん患者。【方法】 夜間・休日電話相談を記録している「電話内容相談記録用紙」より, 夜間・休日の外来相談件数, 相談時間, 相談内容を調査し傾向を解析する。【結果】 乳がん患者の相談件数は 75 件(全相談数の 8.8%)。うち化学療法・ホルモン療法の副作用に関する相談 27%, 術後・生検後の創に関する相談 24%, 疾患に伴う症状の相談 25%, それ以外の相談 24%であった。【結語】 治療や疾患に関する相談が 76%を占め, 相談窓口となって対応する看護師には専門的に分析できる知識や技術が必要である。夜間・休日は当直医対応となることから当直看護師の役割は非常に大きい。更なる調査から詳細を把握しチームとして支援するためのマニュアル作成を検討したい。

19. 『乳がん無料相談会』相談者分析—NPO 法人埼玉乳がん臨床研究グループ (SBCCSG) の試み—

甲斐 敏弘 (大宮共立病院 外科, NPO

法人埼玉乳がん臨床研究グループ事務局)

武井 寛幸

(埼玉県立がんセンター 乳腺外科)

井上 賢一, 田部井敏夫 (同 内分泌科)

小島 誠人 (獨協医大越谷病院 外科)

大久保雄彦 (埼玉医大 乳腺腫瘍科)

中野 聡子 (川口市立医療センター 外科)

山下 純男 (深谷赤十字病院 外科)

蓬原 一茂

(自治医大大宮医療センター 外科)

黒田 徹 (赤心堂病院 外科)

内田 靖子 (済生会栗橋病院 外科)

洪 淳一 (こう外科クリニック)

末益 公人 (アルシェクリニック)

ブレストセンター)

NPO 法人埼玉乳がん臨床研究グループ (SBCCSG) は平成 11 年頃から乳がんの多施設臨床研究を行うことを